８．東興及び七重の開拓

吉　野　軍次郎

※明治２９年６月２４日生、宮城県出身。

未開地の入殖者

北海道入殖の動機は、私たちの住む村が、大火に遭い、私の家も焼け出されて、復興するならその金で、北海道で一旗上げようと思いたったもので、父甚六、兄甚八、甚平等と、明治３９年３月北海道に渡った。名寄まで汽車で来たが、私たちの入殖する上興部（東興）へ入る道が分らず、当時名寄に居た同郷人の舟山今朝次（子、今治、後に奥興部に移住）さん宅に世話になった。

この時名寄に居た畠野乙蔵（三五郎－勝三郎）さんと、角田豊次さんも一緒に、東興に入殖することになり、地主の大久保金之助の家に落着いた。

大久保は、今の稲田さんと上西さんの中間の川岸近くに、私たちも含めて起居できる大きな家を建てていた。大久保は私設駅逓を計画して、こんな大きな家を建てたが、米田と競願の結果、米田に駅逓が決定し、大久保は間もなく此所から紋別に引揚げ、馬橇製造を始めた。

当時上興部地域は入殖者は少なく、小林四郎左衛門、上興橋附近に館岡与三松だけで、東興も、大久保と米田の駅逓に、私たち３戸だけだった。

開墾は、今の上西さんから稲田さん附近にかけて行った。入殖の翌年に、土産子の２才馬を買ったが、村内の農家で馬を持ったのは、私の家が最初だった。明治４２年ころ、東興を引揚げて七重の田辺弥助（明治の終りころ三浦事務所附近で菓子屋経営）の小作になり、現在の深川さんと高橋勉さんの中間（池田東五郎）に入り、開墾したが、湿地のため思うような成果が上らず、４年ほど此所に居て、東興の阿部豊蔵の土地（現吉野正一郎）
を買って、ここの開拓に励んだ。

この頃七重では、上の方に原田鉄五郎（現在の日比源晴附近）と、小学校下に石田卯之助、安藤牧場入口に川勝庄太郎、六興橋を渡って古川鶴次郎、関喜伝次がおり、忍路子、上、中藻には入殖者はいなかった。

逓送と五戸橋

上興部の駅逓には、米田の親類の川村さんが、管理人をしていた。

私の家でも冬だけだが、頼まれて逓送を２年ほどやった。逓送は、普通小包などを運ぶのは、夏は馬車、冬は馬橇で、現金や書留を運ぶ者が別に居て、駄鞍に、３個か４個の行のうを積んで、逓送夫は拳銃を下げていた。

明治の未だったと思うが、今の七江橋（鉄橋の下流にあった）附近の坂で、逓送馬車が引っくり返り、逓送夫が死んだことがあった。

逓送には、汽車の時刻表のように、発着が定められているのに、上興部の駅逓には何時になっても逓送馬が到着しない。あまりにも遅い延着に大騒ぎになり、探したところ、七江橋の坂のところで逓送夫が、馬車の下敷きとなり、目の玉を飛び出して死んでいた。

この逓送夫は、東北の五戸出身だったので、しばらくの間、今の七江橋を五戸橋と

言ったものだ。

先生を追い出した生徒

私は、七重に移ってから、六興の教育所に通うことになったが、うちのおやじは、人一倍働く方なので、夏は学校よりも、畠の手伝いをさせられ、１年のうち半分位しか通学できなかった。

その頃の教育所は、旧六興橋近くの市街寄りの高地にあって、４間に５間位（１間は約１．８２米）の掘立てで、屋根だけは柾葺きだったが、壁も長割柾の一重だったので冬は寒く、父兄の手で、稲きび殻で壁を囲ってもらった。教室は一教室で、板の間にむしろ敷きで、冬は焚火だったが、間もなく丸い大きな薪ストーブがついた。初めは机がなく、腹ばいになって字を書いた。

学用品もエンピツがなく、石坂に右筆で字を書き、現のない生徒は、イタヤの木を、硯のように作って使っている者もあった。これらを風呂敷に包んで、肩から背負って通学したものだ。

服装は、着物にもんぺで、夏は手製の下駄や、唐きび殻の草履、冬は赤毛布を足に巻いて「つまご」を履いた。しばれる日には、帰るとき「つまご」がかんかんにしばれて足が入らず、困ったことがあったが、その後、ストーブの上に棚を吊ってもらってからは楽になった。

そのころの生徒は、年令がまちまちで、１７、８才になる者もいて、２０〆俵（約７５キロ）の俵をかつぐ生徒さえいた。

先生は、赤坂三五郎といって、沙留の漁場で帳場をしていたと言う人だった。５年生、６年生には、辞典と首引きしながら教える程度の先生であった。

この先生は、唱歌の時間になると、漁師の歌ばかり教えるので、ある時皆で流行歌を歌ったら先生は怒って、生徒たちを散々になぐりつけた。しまいに生徒たちも怒って、皆で先生を袋叩きにしてしまった。小学生と言っても、大きな力持ちの子供もいたから先生に負けなかった。

翌日学校へ行ったら先生がいない。何所かに逃げて終ったのだ。今になると生徒の私たちも悪かったと思っている。

仕方なく、上興部の教育所に通ううちに、渡部徳次先生が赴任してきた。渡部先生は、三浦さん附近で二階建ての宿屋をやりながら先生をしていた。

そのころ農繁期になると、赤ん坊の子守りをしながら通うものもあり、飽きた赤ん妨が泣き出したりして、満足な勉強が受けられなかった。

※西小沿革史には、赤坂三五郎の教員名がない。赤坂は短期間の在任であったのであろう

竹で尻重ふく

私たちが、七重から東興に戻ったとき、Tさん（仮名）の家に行ったら、熊笹や、根曲り竹を４寸位（１２センチ）に切り、細く割ったものが、沢山干してあるので、何に使用するのかと思ったら、便所の落し紙の代用にするのだと判り、驚いたものだった。秋になるとイタドリの茎を割って使っていた。当時は、新聞紙一枚、古本一冊でも貴重品だったので、便所の落し紙などもこうやって、代用した時代があったのだ。

※編者が、昭和１９年１月、所属する部隊が、動員で満州から台湾に移駐したとき、戦友の一人が原住民の便所（殆ど家外）を借り、「台湾では便所に爪楊枝が置いてある」と細く割った竹を口にくわえて出て来て、これが、落し紙の代用だと分って、大いに気分を悪くしたことがある。年代も明治と昭和とに離れ、また南と北とに隔たっていて、これら知識の交流はなくても、生活の知恵は、かくして同じように生れたのであろうか。

開墾異聞

東興の千葉永四郎さんは、私より２、３年遅れて入地した人で、あの人の入殖地は、太い熊笹の密生地だった。この熊笹を刈り払うに、丁度内地の湿田に使うような、大きい四角の厚い仮に、鼻緒をつけて、これを履いて笹刈りをしていたが、笹の切り口が、足に刺さらないようにしたものだろう。

平間甚助さん（現武田時光附近入殖）は、良く働く人だったが、開墾時には、上半身裸で、あのころは、蚊や、虻やぶよが、目も口もあけられない程いて、よくも裸になっていれるものだと、感心したものである。

また荒地開墾も他人とは違っていて、どんな長く太い熊笹でも、決して刈り払いをせずに耕し、その後で火を付けて焼き払った。こうすると肥効が永く残るためらしく、開墾にも、いろんな方法があったようだ。